



郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。

阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

幕末の三筆（書道家・画家）

貫名 松翁

1778年、現徳島市弓町に生まれる。江戸時代後期の文人画家で、とりわけ書は幕末の三筆と称されている。

幼少のころより絵の才能に優れ、書は文化人の西宣行に学んだ。また現那賀川町の高橋赤水には儒学を学び、松翁が大成する基となった。

松翁は十代中頃に、黒津地町の松原が美しい風土や海を好み、黒津地町の朱色の赤門で有名な光明寺に居住。閑静な場所にあるため、書画の研究に没頭できる絶好の場所であった。松翁は書画の鍛錬に励み、ここに優れた作品を残している。それが「廬山之記」である。



松翁書『廬山之記』（光明寺蔵）
阿南市指定文化財

この作品は中国高祖、惠遠大師が書いた「遊匡廬山之記」を松翁が書き写したもので、松翁54歳の頃の作品である。少年期にお世話になった光明寺に送られたもので、この書は美しさと迫力に圧倒される字形が全体を通し調和された作品で、まさに松翁の傑作といえる。なお、この作品は阿南市の文化財に指定されている。

松翁は阿南での生活の後、高野山、大坂、京都などで修行。中国の王羲之から書法を学び、空海の書から日本的書を体得し、伝統的な書芸術を確立した。松翁研究の第一人者であった徳島大学名誉教授の故田中双鶴は「古来から古典として伝わる書の

基本を徹底的に研究し表現した数少ない人物である」と評している。

1863年松翁は86歳で生涯を終えた。京都東山高台寺に永眠。

稲の新品種 権八米生みの親

中西 小十郎

小十郎は江戸時代後期、1813年に旧中野島村に生まれた。中野島村は那賀川と岡川にはさまれた低地の湿地帯で、当時は大雨が降ると地形が変わるほどに河川が氾濫する地区にあり、田畑には不向きな場所であった。小十郎はそんな環境のなか

で、台風などの来ない時期に収穫できる品種の稲（早稲）の開発に尽力した人物である。

小十郎は田植え後の追肥の時期や肥料の内容、冬場も土壌研究に似し、数年の歳月を経て、待望の新種開発に成功した。開発された新種は収穫量も多く、台風にも影響されなかった。この新種は「権八米」と名付けられたが、その由来は小十郎宅の近くにあった権現を祀る丘と八幡神社から一字取り、名付けたといわれている。

小十郎の子、徳蔵も父の遺志を継ぎ、多年改良を重ね、権八米は県内はもとより県外にも広がり、大日本農会などから多くの賞状を受けている。

参考資料

「阿南市の先覚者たち 第二集」
2014・阿南市文化協会

☆次回（9月号）は「美馬順三」
「井上節齋」を紹介しします。

問い合わせ
文化振興課 ☎22-1798